

我が町のスポーツマン(1) 栗田昭夫

藤 原 健 固

A Man Who Domesticated Sports in His Own Community (1): Kurita Akio

Kengo FUJIWARA

1. 天井を走る気合

師走の凍てつく空気の中に、「エイッ、ヤーッ」と気迫のこもった掛け声が響く。道場の板張りに反響して30人の少年拳士の掛け声は気迫に乗せられて天井を走る。

天井を走る共鳴音。それはさらっとしていて人の胸を打つ。もう7年にもなるが、二度目の断食をした時のことだ。成田山新勝寺の断食堂に籠もった。朝の僧侶の勧行の末座に座らせてもらった。本堂の正面には仏像をかこむようにいくつかのちょうちんに灯がともされ、左隅の一角では直径2メートルもあろうかと思われる大太鼓が若い僧侶によって力強く打ち鳴らされていた。そして、仏像の正面にしつらえられた台座には高僧をかこんで30人ばかりの僧侶が経を和している。高僧のくべる護摩木が時折パッと燃え上がる。太鼓の音と僧侶のリズミカルな読経が相和し、護摩木の灯が一瞬揺れたと思われた瞬間、共鳴音が天井を走った。走ったというより、さわやかに通り抜けたと言う方が正確かも知れない。天井の造りにも関係があるのかも知れない。しかし、それはどうでもよい。

音を姿で見たと思った。経は音楽であり、サンバのリズムだとさえ感じられた。何としても明るく、躍動感に溢れていた。

このリズムと躍動感——それはどこから来るのだろうか。「浄水少年空手道場」と看板のなかった道場の端の椅子に座って子ども達の気迫を目の前にした時、身振いを感じた。それは7年前身振いで涙がとめどもなく溢れ出てどうにもならなかったあの成田山の本堂を一瞬想い出させた。その一瞬の想いは拡大レンズでみた野の花の花弁にも似て、いかにも鮮やかに過ぎた。

2. 幸っちゃん入門

中学1年の宮本幸子は小学校に入学すると同時に、この道場入門したかわいい女の子である。入門の時、幸っちゃんは空手を嫌った。それは父親とただ一度だけ見たテレビのプロレスの印象が強過ぎたからである。画面に飛び散った血の赤は、小学生の彼女にとって余りにもショックだったのである。空手をやらないか、との誘いに幸っちゃんは即座にノーと答えたそう。それは言葉だけでなく、不用意に予期せぬことを突然言われた時に見せるあの体ごと訴

えるボディランゲージそのものだったと言える。幸っちゃんにとって空手イコールプロレス、そして血、野蛮以外の何物でもなかったのである。

空手のもつ、いや日本の武道のもつ人間的側面に幸っちゃんの父親は常々心を魅かれてきたと言っている。空手に限らず、およそ道のつく種目は(スポーツに限らず)、技を通じて人間を創ることに意義がある、と彼は思っている。彼に従うとそこにこそ武道の現代的役割があり、それが欠けているのが今の世の中である、ということになる。確かに、形を整えることを通じて中味を完成させるやり方は古来から面々と引き継がれている。それは一見古くさく反動的な嗅いすらするが、事実は違う。中味をのみ問題にし、中味のみを掌中に収めようとする時、中味は掌中から抜け出してしまう。水が器に依じて自らを変え、形に従う如く、技という形を整えその中に自身を据えることこそ中味を重視する者のとるべきひとつの態度である。これが武道の精神であろう。

このように考えてきた幸っちゃんの父親は、娘に武道をやらせたいと思った。そして娘は小学1年になった。7歳にもなってみると、娘の日常生活での立居振舞いには、目を疑うものがあった。一口で言うといかにもだらしない。時間は守れない。返事はできない。きちんと座ることさえできない。食事をするのに1時間もかかる。テレビをやたらと見る。あげていけばきりが無い。とは言っても子供は親の鏡だ。食事時間を除けば全部親のコピーに過ぎなかった。

そこで父親は、空手そのものの技ではなく生活面への好影響を期待した。道場に行ってみると冬でも床の上に静座している。動作はきびきびしている。返事は申し分ない。そして、ともかく皆生々している。彼はこれだと思った。家庭でそうであって欲しいと思った。しかし、この期待は、後に見事に裏切られることになったが。ともかく、彼は娘に空手をやらないかとしつこく推めた。しかし、一向にその気にならない。そこで、バイオリンの鈴木式というのを

思い出して、実際に道場につれていき窓越しに見せる作戦をとった。しかし、そうすればするほど彼女の抵抗は強くなった。しまいには見るのさえ拒否する始末だった。後で考えてみるとそれも無理はなかった。道場ではしばしば組み手が行なわれていたのである。この道場は寸止めといって実際には相手を倒さず、相手の身体を直接攻撃しない。しかし、時おり相手に当ることがあり、顔をまっかにして耐えたり、なかには泣き出す子もあった。技を理解できない幸っちゃんにとってこれはケンカでありプロレスと同じであったに違いない。

そこで、父親は剣道を見せることにした。これは効果があった。防具で身を固め竹の棒で相手をほんとうに打ち合う姿を見て、娘は恐怖心を抱いた。父親は空手がいやなら剣道をやれと強要した。しかし、娘は依然としてどちらもいやだと言った。そこで父親は今度は柔道を見せた。娘は顔をそむけた。まさにとっくみ合いのケンカにしか見えなかったのである。また父親は言った。この3つのうちどれかやれと言った。娘は、やるともやらないとも言わなくなった。そして1週間過ぎた。娘は次のように母親に言った。「どうしても何かやらなければならないの？ 私はあまりやりたくないのに。でも、どうしてもと言うんだったら空手をやることにするわ。だって空手は恰好だけみたいでしょ。それに剣道も柔道も道場に行くのにバスに乗らなくちゃいけないんだもの。空手は歩いても15分ぐらいだから」と、まあこんな具合で娘は空手を選んだ。そして父親は娘を道場に連れて行った。栗田先生に会って「娘がやりたいと言っているので」とお願いした。先生は無愛想に「ボクの所は、やる気のあるものしか預かりません。1ヶ月間はそれをみます。明日から来て下さい」と言い、幸っちゃんに向かって「やる気はありますか」と多少語調を強めて念を押すように聞いた。彼女は即座に「イヤです」と答え、ぶちこわしになった。

また、1週間が過ぎた。この間、父親は何も言わなかった。娘はまたもや母親に言った。「やっぱり行くわ。だっていつかミナリが落ち

るかわからないんだもの。」そして、幸っちゃん
はひとりで歩いて出かけた。夕食の時、彼女は
そのことを話した。しかし、その顔には諦め以
外の表情はなかった。

こうして幸っちゃんの道場通いが始まった。
1年、2年とたつにつれあれほど嫌々ながら入
門したにもかかわらず、空手の技に興味をもつ
ようになっていった。時々、空手着のまま平安
二段とかいう初歩の型を茶の間で演技してみせ
たりした。そして、昇級試験もそれなりにこな
していった。

そして、幸っちゃんは中学生になった。学校
の運動部よりも空手道場を選んだ。週2日の空
手の練習を優先させ、中学でやりたいと言っ
ていたバレーボール部に入ることを断念したの
である。この選択がよかったかどうかは、後にな
ってみなければわからない。

これほどまでに幸っちゃんの気持ちを引き付
け熱中させた背景には、空手そのものの魅力が
大きかったに違いない。その魅力を教える栗田
昭夫とはどんな男であろうか。

3. 空手に取りつかれた男

栗田昭夫。昭和21年7月1日生まれ。39歳。
静岡県島田市生まれ。県立島田工業高校を卒業
し、荒川車体株式会社に入社。20年になる。仕
事は車輛検査である。

栗田が空手というものを初めて見たのは、昭
和40年の4月だった。高校を卒業し、単身豊田
市にやってきた。そして、彼のサラリーマン生
活がはじまった。

豊田市に来てみると、そこには一大企業が
あった。トヨタ自動車である。今では日本一の
企業業績をあげ、世界のトヨタとして自他とも
に許している。そして、豊田市におけるトヨタ
自動車の存在は、あたかも城主のようなもので
あった。いわゆるトヨタ城下町としての豊田市
には250に昇る下請け企業があり、いくつかの
有力関連企業があった。荒川車体もその1つで
あり、トヨタを名主として仰いでいた。

栗田にとってこうした豊田市は、目を見張る
ものがあつた。それは活気であつた。トヨタ自

動車を中心とする車の街、豊田は県外から流入
する人々でいっぱいだった。ちなみに昭和40年
当時の豊田市の人口は約15万人であり、その7
割までが県外から豊田に働きに来た人々であつ
た。街といっても地方中核都市としての豊田は、
田舎の風情を多分に残した街でもあつた。しか
し、県外からの流入者は競って土地を買いマイ
ホームを建てていた。車で走ってみて印象的
だったのは、隣の瀬戸市が陶器の不振によって
街全体が灰色のイメージで構成されていたのに
対し、豊田市はカラフルで明るいイメージに満
ちていたことだ。それほど車の街、豊田は活気
に満ちていた。

しかし、栗田にとってそんな目を見張る活気
の街も、今ひとつしっくりいかなかった。栗田
はそのことについてそれは一体なんだろうと
種々思いめぐらしたが、これだと思い当るもの
はなかった。しかし、その街に20年も住み結婚
し2児の父親となった今、その答えが判るよう
な気がしている。これは一言で言えば、計算さ
れ尽したことから生ずる不安、とでも呼べるも
のであつた。高校を出て自分の足で歩いてみる
と、建物や道路は言うに及ばず、会社の人間関
係にも計算が大きく入り込んでいた。それは若
い栗田青年にとって胸を押さえつけられるよう
な圧迫感を与えた。この圧迫感は、若者をして
しばしば仕事を放棄させる大きな原因のひとつ
である。いわゆる入社後1ヶ月を経て会社や地
域に慣れ始めた頃、この5月病は頭をもたげる
のが普通である。

そんな或る日曜日、街をブラブラ歩いている
と不動産という文字が目飛び込んできた。そ
れは後で判ったことだが、東海地区を中心に結
成された空手の組織であつた。そして、豊田市
にその支部道場が設立され、練習生を募るビラ
であつた。栗田はその足で道場を尋ねた。道場
といっても粗末なものであつた。それは市役所
の近くの西町ガソリンスタンドの横にあつた。
不動産道場と麗々しく書かれた看板が場違いな
感じがするほど、荒れた小屋に過ぎなかった。

しかし、栗田にとってその日は新しい出発の
日となった。道場の窓越しに見た組み手は、彼

の胸をしめつけていた圧迫感を一瞬のうちに追い払った。「エイッ！」という気迫のこもった掛け声を聞く度に、栗田はそれを耳ではなく体全体で聴いていることにさえ気付かないほど一種の感激を受けていた。この時ほど、せっぱつまった緊張感を味わったことはなかった。そして、以後、彼はこの緊張感の虜になっていくのである。

入門して1年で初段をとった。その頃、練習は童子山小学校の体育館を借りてやっていた。練習場に恵まれなかったこの時期、野原でやったこともある。そして、さらに1年後の春、2段をとった栗田は勤務先の荒川車体で空手のクラブをつくった。

4. 空手に賭ける

会社でクラブをつくった彼は、ますます空手にのめり込んでいった。出世よりも空手を選んだ、と言い切る栗田は、言われた以外の仕事はやらなかった。と言っても仕事をサボったというわけではない。時間内で目いっぱい働き、その働きぶりは誰もが認めるところだった。楽にブラブラしている、いわば働かずサボらずの同僚と違って、やるだけのことはやった。そして、10分でも多く練習に当てた。

こんな栗田をみて或る上司は言ったものだ。

「お前みたいに空手にうつつを抜かしている極楽トンボはシアワセだなあ。」しかし、皮肉ばかりを言う上司だけではなかった。空手に打ち込む姿を良しとする上司もいた。栗田に言わせると、どちらの上司もそれほど眼中になかった。

「20年間空手をやってきました。その長い年月の間には、いろんな上司がいましたよ。しかし、相手はくるくる変るんです。いつも同じ上司ではないんです。理解のある上司の時は幸せだったと思います。しかし、そうでない上司の場合も、しばらくすると他の人に変っていききました。」だから、たいしたことはなかった、と言うのである。たんとんと語る栗田は、しかし胸の内に強い意志と、やり通してきた、という自負をのぞかせていた。それは、周囲に気をつかい、いつも自分が考えていること、やることを、周

囲がどう見ているか、どのように評価しているか、戦々恐々としている現代人への警鐘とも受けとれる言葉であった。漱石の「野分」の主人公ほどではないにしても、栗田は自らの道と自らの足で歩む姿勢を固くなに守ってきたと言える。

こうした姿勢は、空手そのものに対する取り組みにも現われた。不動会に入会した1年後2段をとった栗田は、勤務先の荒川車体で空手クラブをつくったと同時期に、不動会から糸東流に変わった。その理由について彼は多くを語ろうとしない。しかし、空手の技を通じてその道を極めようとする多感な青年にとって、糸東流の方がより意に叶っていたと判断したことだけは確かである。

会社でクラブをつくった後、技の習得を通じて道を求めるという空手道へののめり込みようは徹底したものがあった。それは気迫に集約されていたと言える。40歳を迎えた今でも、彼の気迫は胸を打つものがある。その気迫が道場では気合となって天井を走るのである。それは稽古に現われる。苦しい稽古に立ち向かい、日々の稽古を積み重ねる過程で栗田は、いつも自分に言いきかせたものだ。「苦しい稽古は当然だ。しかし、その苦しさを解き放してくれるのは稽古しかない。稽古から逃げたらそれで終わりだ。」こうして、苦しい稽古をのり切る秘訣を自らの稽古の中で掴んだ。それが気合である。気合を入れて突き、蹴りに立ち向かう時、苦しさは向こうの方から姿を消す。後に残るのは充実感であり、それが空手への魅力を一層強める。しかし、気合を維持させ安定させることは難しい。そんな時、彼は空手に対する自分の意気込みを執拗にまでみせた。「負けてたまるか。ここが正念場だ。稽古は自分自身のためにある。ここで負けたら空手の技も心も掴めない。」

しかし、栗田にとって空手の技と心は遠く掴み難いものに思われることがしばしばだった。そんな時、仕事を終え、ひとりで近くの河原に出かけ、工夫に時間を忘れたものだ。素人の私にとって空手のことはよく判らないが栗田の空手を見て確実に胸を打つものがある。それは気

迫の中に正確な技を追求しているということである。誰もがそうであるのだろうが、彼の場合その印象がとくに強い。ひとつひとつの動きが正確であって、気迫に満ちている。そして、全体が何となくまろやかな感じを帯びていると言ったら良いであろうか。それはちょうど円を描いているような動きだとも言える。ひとつひとつの技そのものは直線的で鋭角的であるけれども、全体的には円運動の中にすっぽり納まっているという感じなのである。

この感じは、40歳を迎えた今、彼の日常生活にも現われている。道場で子ども達に接する態度は、厳しい。それは直線的で妥協を許さない。しかし、全体的にみると何とまろやかで、子どもたちの信頼を得ていることか。子どもの抱えている問題が子どもに大きな負担を与えている現在、彼によってどれだけ救われていることか。

こうして、栗田は社内の空手部を指導し、全国実業団大会で3回戦まで駒を進める一方、自らは五段の実力である。今年(昭和60年)六段に挑戦したが失敗に終わった。

5. 子どもに教える

昭和41年浄水少年空手道場を組織し、それまでの会社だけの指導から地域の子どもの指導の道を開いた。

道場に一步足を踏み入れて驚くことは、緊張感の中に道を求める姿が生きづいていることだ。子ども達の動きは、ここでは別人のように思われる。返事も気合もきびきびしており、動作もすがすがしい。目が輝いている。そして、あの冒頭で述べた気迫のこもった共鳴音が天井を走る。

栗田は子ども達の指導について、その基本を次のように話した。「空手の技そのものよりも、精神的強さを育てる。」しかし、これは大変なことだ。確かに、道とつく種目はその技を通じて道を求めることを意味している。それは形を修めることを通じて結果的に心を修めることを意味する。しかし、これは難しい。この場合、栗田によれば、「精神的強さ」とは耐えること、がまんすることである。苦しいことに耐えてこそ、

自分のカベを破ることができるという信念は、彼の空手道への取り組みから来ている。それは前述の苦しい稽古をのり切る秘訣を自らの稽古の中で掴んだ体験に支えられている。それ故、彼は稽古から逃げることを許さない。

苦しさの中で体得した精神的強さは、中学・高校になってきつと役立つ、そして、大人になってからも、と栗田は強調する。だから、途中で空手を止めないで欲しいと願っている。しかし、子ども達の中には止めていくものが多い。止めないまでも、嫌々ながら道場にやって来る子どもも多い。好きで道場にやってくる子どもは1割位だと言う。やめていく子どもが多く、やめないまでも嫌々ながら道場に足を運ぶ子どもが大半だと聴いて、実際に道場に行ってみた。そして、2つのことに気がついた。ひとつは、道場内での妥協を許さない栗田の指導である。栗田は子どもの体力・気合、そして気持の流れまでも読んでおり、その子に応じたギリギリの線で技の修業を要求する。ここでは子ども達は逃げられない。力を抜くことが許されないのだ。これに対して弱さを示す子どもがいない訳ではない。中には泣き出す子どももいるし、幸ちゃんのように家に帰ってから部屋に閉じこもって泣くものもいる。

ふたつは、栗田が言うほどには嫌々ながら道場にやってきている訳ではない、ということだ。子ども達は厳しさに耐えている反面、その表情は明るくすがすがしい。練習が終わった後、子ども達に聴いてみたが、どの子も「おもしろいよ」とわいわいがやがや騒ぎながら帰って行った。

6. 栗田の嘆きとその背景

しかし、栗田の次の悩みは本当だ。「せっかく小学校6年までやっても、中学へ行くとバタッとやめてしまう。これからだ、と言う時にやめるのは残念だ。」確かに、中学に行くと同時に道場をやめる子どもがほとんどだ。その背景には中学での部活動との関係がある。愛知県の場合、とくに指摘される現象かもしれないが、運動部への入部が奨励され、朝練が頻繁にあり、放課後ももちろん練習し、下校は日没45分前という

のも珍らしくない。

中学に入ると同時に空手をやめる背景にはこうした学校側の姿勢がある。それは学校が子どもを信頼していないからではないだろうか、と栗田は考えている。文化部よりも運動部に入することを勧め、且つ全員部活動参加を徹底しようとする。しかし、これほどまでに運動部志向を徹底しようとする目的はいったい何だろうか。

近所の子どもの様子をみていて気になることがあったのは、それほど前のことではない、と栗田は言った。近所のA子ちゃんは、小学校時代活発でその元気のよさは、見ていて気持がよかった。ところが、中学に入って2ヶ月もすると急に元気がなくなった。近所の人からも心配の声がきかれるようになった。母親の話しでは、部活動のバスケットボールの練習と宿題で睡眠時間が、5、6時間しかなく、食欲もあまりないということだった。

話しでは朝練が始業の8時20分までに1時間あり、授業が終った放課後の練習は3時間位だという。栗田が不思議に思ったのは、練習がそんなに長時間、そして毎日出来るだろうか、もし出来るとしたらどんなやり方をしているのだろうか、という2点だった。確かに、大学や実業団の練習では長時間やっており、1日6時間や7時間の練習は珍しくもない。そして、練習内容も濃く無駄がないように思われる。しかし、中学生が、それも授業があり、そのうえ宿題もどっさりあるなかで、そんなに長時間運動の練習ができるものだろうか。また、発達発達の面から無理はないのだろうか。

こんなことを考えているうちに、栗田はとにかく中学の部活動の実際を自分の目で見て確かめるのが良いと思った。放課後、部活動が始まって1時間位した時、グラウンドのそばの道路で見学させてもらった。そこで気づいたのは、まずみんなとても活発で元気がいい、ということだった。それはハチの巣をつついたような騒しさを伴っており、栗田からしてみれば自分の過し日の大きさを思い知らされるようで子ども達がまぶしかった、に違いない。

しかし、そのまぶしさの中に彼は一種の弛緩

というか、怠惰な感情を認めないわけにはいかなかった。つまり放任された遊びからくるもののように思われた。よく注意してみると、そこには練習プログラムに従った一貫性というものがないように思われた。たまたま、この日はテニスの練習に絞ってみたのだが、上級生らしき部員がやたらボールを打っている。そして、下級生らしき部員は、ボール拾いに徹している。彼が後で生徒に聞いた話だと、1年生はラケットを握らせてさえもらえない、ということだった。そして、指導の教師は見当らなかった。これも後で聞いて判ったことだが、テニスの顧問はテニスをそれほどやったことがない先生ということだった。

こうしたことは、すなわち、プログラムに従った練習の一貫性の欠如と、そうならざるを得ない指導者不足の問題は、ひとりテニス部だけでなく、かなり多くの部で認められるのが現実である。それは教師が全員運動に秀でていいるとは限らないことから明白である。それまでの生活で自ら運動部に所属し、スポーツに汗を流し、その種目の技を習得し、種目独自の楽しさを肌で体得している教師はそれほど多くはない。このことは、大学時代運動部に所属する割合がきわめて少ないことをみてもうなづける。

栗田は校長に会ってみたいと思った。というのは、いつかの地区懇談会で「父兄のみなさんとのコミュニケーションを望んでいます。いつでも校長室においでください」という校長のことばを思い出したのである。校長は物腰の柔らかなそれでいて芯の強そうな教育者といった感じの紳士であった。

校長は自ら信ずる教育論を熱っぽく論ずるよう語った後で、「何ととっても、中学生は心身を鍛えることが大切です。ですから、うちの学校では部活動に力を入れています。とくに、運動部がいいですなあ」と、胸を張った。それで栗田は質問したものだ。「どうして運動部がいいんですか？」校長は、運動の心身に与える効果を強調した。それで、栗田は重ねて質問した。「それはよくわかります。しかし、朝の練習に加えて放課後も長時間練習をするのはなぜです

か？」校長は、運動の心身に与える効果を再度力説した。それで栗田は失礼をも省みず、重ねて同じ質問をした。「それはよくわかります。私がお尋ねしたいのは、本当のねらいです。運動はやらないよりもやったほうがよい、というのは必ずしも正しくない筈です。また、1時間やるよりも2時間やったほうがよい、というものでもない筈です。まして、上手なものの方が下手なものよりもよい、ということは言えない筈です」そこまで話すと校長は急に不機嫌な様子を顔に出して、「そんな考えは間違っています。考えてもみて下さい。運動は健康によい、というのは世間の常識じゃありませんか。1時間よりも2時間やったほうがよいに決まっています。だから、うちの学校では生徒に運動を勧め、できるだけ運動に親しむようにさせているんです。そして、上手なものの方が下手なものより良いに決まっているではありませんか。数学でも出来るものの方が出来ないものより良いに決まっているのと同じですよ。」私もこの考えに反対である。確かに運動は健康に良い。それも単に身体健康だけでなく精神健康にも社会的健康にも効果がある。しかし、問題は、運動をすれば健康に効果がある、と単純に言えないことだ。身体健康に対する運動の効果をみても、運動をしたために身体をこわした例はいくらでもある。要は運動に対する取り組み方にある。取り組み方を無視して、ただやればよいとか、1時間でも多くやったほうがよいとか、といった考え方は危険であり、運動についての理解をもたないことを意味している。こうした無理解が昂じると上手なものが下手なものよりも良いという結論を導くのである。確かに上手であることにこしたことはない。しかし、上手であることが直ちに健康を意味しない、のが現実である。それは上手になる過程で棄ててはいけないものまで棄ててはいないかという問題である。

しかし、中学校側の部活動、とりわけ運動部への肩入れは、実はこうした運動に対する無理解にあるのではない。「校長先生、運動の効果についての可能性はそのとおりですし、効果を期

待する気持ちもそのとおりだと思います。しかし、それは量と質の問題をもっているのではないのでしょうか。それはやり方とどれだけやるかという問題です。すなわち、一貫した指導体制をもたず、ただ時間だけ多くやるというのは、運動の期待・可能性を裏切るものではないのでしょうか。本当の狙いは何ですか？」この最後の栗田の質問に対して、校長は言ったものだ。

「確かにそういうことは言えましょう。ただ、うちの学校は新設校ですし、今、社会的問題になっている子どもの問題を抱えていますから。」

この校長の言葉は、運動部に肩入れする中学校側の本当の狙いを物語っている。そして、それは次の事情を背景にしている。ひとつは、「新設校ですし」という言葉の背景である。新設校は高校ほどではないにしても社会的評価を気にすることは確かである。世間から良い中学校と評価されるためには、2つの点に優れていることが重要である。その1つは、学習成績であり、端的にはどの高校にどれだけ入学させたかにかかっている。そして、この場合、中学浪人は絶対に出さないことが至上命令として課せられる。試験の点数によって機械的に事務的に受験校が教師の手によって決定される傾向が強い。こうした枠の中で高校受験体制が組まれる。「そんなことでは高校に受からないよ」という言葉は、子どもにとっても親にとっても一種の脅迫観念としてつきまとう。

しかし、受験する前に入学すべき（或いは入学できる）高校は決まっているのだ。このパラドックスは高校に入学するとよく判る。高校ではもはや「そんなことでは大学に受からないよ」という言葉は、それほど意味をもたない。そんなことを言われても大学を受けない生徒が半分以上もいるのだ。全国的にみても高校卒業生のうち大学に進学するのは36パーセントに過ぎない。中学校で「そんなことでは高校に受からないよ」という言葉が、生徒を縛る力をもつのは、そのほとんどの子どもが高校を受験するという単純な事実を負っている。決して、「そんなことでは高校に受からないよ」という状態にはないのである。ちなみに、高校受験に失敗する

割合は極めて低い。それ故、学校の受験校決定の指導は徹底しており、どこかの高校に受かるように、生徒の書く願書は割り当てを受けた願書に過ぎないのである。

こうしたパラドックスの中で、子どもは勉強を強いられる。しかし、それは予め予定された枠の中でのものである。ちなみに、単願を受け入れた子どもと親の失意の顔をみよ。単願とはそれほど受験競争の不高い私立高校への出願のひとつの形式を意味することが一般的であり、その高校のみ推薦で受験するというものであって、公立高校の受験に先立って行われる。単願の特徴は、合格が保証されているということであり、同時に他校は受験できないということである。これでは「そんなことでは高校に受からないよ」という言葉は、全く意味をなさない。試験を受けずして合格通知を手にしても、「そんなことでは高校に受からないよ」という言葉を信じて頑張った気持ちは踏みにじられるばかりだ。それ以上に、挑戦をせずして公立高校を諦める気持ちを押さえることは出来ないのが人情というものである。

こうした矛盾は、ひとり勉強のみにあるのではなく運動部の問題にもみられる。中学に入ると部活動の募集が行われる。その際、運動部に入ることが奨励され、文化部に入るのは落ちこぼれ的感觉で受け取られる。そこで小学校時代のいわゆる習いごとは続けるのが難しくなるのである。

勉強と運動部の練習で中学生は、一日中管理されていると言っても過言ではない。運動部での練習は時間的に長く育ち盛りの中学生といえども体力はぎりぎりのところまで消耗され、遊ぶ気持ちも時間も残されていない。実はこれが学校の本当の狙いでもある。建て前としての心身を鍛えるという思想は、現実の非行防止という本音に容易にとって替えられる。非行に走るエネルギーも残さないほど運動部でキタエルのであり、それをダメ押しするのが「そんなことでは高校に受からないよ」という勉強面での締め付けである。

こういう現実からは、運動による心身の健康

も保証され得ないし、まして非行防止という現実の願いも叶えられない。それは非行が年々増大しているということの中学校の現実からも明らかである。非行に走る時間もエネルギーも与えないための運動部奨励からは、運動による心身の健康に与える効果は期待できないからである。それは楽しみの確保と適切な指導が得られ難い、ことに根ざしている。スポーツが心身に良い影響を与える前提条件の最大のものは、声を出し汗を流して身体運動をすることが楽しい、ということに根ざしている。楽しさが確保されない身体運動は、時として苦しみにしか過ぎない。そして、適切な指導のもとに運動が行われることが重要である。正しい方法で運動が行われて初めて望ましい効果を期待できるのである。しかし、正しい方法、とりわけその指導そのものに問題があるのであり、中学の部活動においてこれが問題なのである。それは既述の運動に対する理解のなさであり、そこからくる指導法の欠如の結果である。放課後運動を楽しみたい中学生はそれほど多くいるとは考えられないし、皆が皆血まなこになる必要もない。ちなみに、社会に巣立ってからの日常生活の中での運動を楽しむ人々の割合は、せいぜい10パーセントから15パーセントに過ぎない。いわば、学校を卒業すると同時に運動も卒業する傾向が強いのである。すなわち、やりたくても種々な都合で出来ないという現実もあるが、出来る状況でもやらない人々の方が圧倒的に多い。こうしたことから言えることは、中学校の部活動に対する反省と改善が必要だということである。それは端的には、運動を過度に奨励しないことと指導をきちんとするということである。

まず、運動に対して興味を持ちやりたいと思っている生徒に対して運動部入部を奨めるといふ基本に立ち返る必要がある。それは、言うまでもないことだが、非行防止のために運動を利用する、という考え方を拒否する。非行防止のために運動が使われることは、邪道であって運動を冒瀆するものでしかない。

つぎに、適切な指導という点については放課後の活動は学校教育から切り離し、生涯スポー

ツの一貫として位置づけることが望ましい。そうすることによって得られるメリットは非常に大きい。学校区内のスポーツのベテランに依頼してスポーツの指導を依頼するのである。たとえば、空手をやりたいと思っている生徒たち(小学校時代空手をやってきた生徒たちにとってそれを続けることは現実的な要請でもある)に対して、栗田のような地域の指導者が当たる。練習時間の問題もあるが、弾力的に処理すれば可能である。こうすることによって、すなわち、学校区を中心とする地域のスポーツのベテランに指導を依頼することによって種目独自の技能を合理的に伝えることができ、また楽しさの確保も期待できる。何と言ってもスポーツは種目独自の楽しさを体得してゆくことが大切であり、そのためにはその楽しさを体得している指導者のもとで練習することが肝要である。

さらに、放課後の運動部を生涯スポーツの一環に位置づけるメリットは(文化部についても言えることだが)、地域社会とのつながりを生徒がより強く自覚することにある。それは非行防止といった消極的効果以上に、地域によって育てられ期待される社会人に成長する過程での積極的効果を意味している。

7. 栗田の願い

中学進学と共に道場を止めていく子どもが大半を占める中で、幸っちゃんも別の道を選んだ。それは空手を続けたいという願いから部活動としての運動部を避け、落ちこぼれと言われる図書文芸部を敢えて選んだのである。彼女は言ったものだ。「私は背が高いからバレーボールとバスケットボールの先生から誘いを受けた。どちらも興味があったけれども、断った。そして、もっとも楽な部活動を選んだ。図書文芸部は落ちこぼれ組と言われるだけあって時間の余裕もあるし、先輩後輩との仲も厳しくない。私は学校の部活動に期待をかけていない。だけどその分空手に打ち込める」そして、1年後、彼女は「やっぱり図書文芸部を選んで良かった。余裕はあるし良い友達もたくさん出来たし、それに百人一首をやったり図書館の手伝いをしたり、

とても楽しい」と、言っている。そして、空手への情熱は強く全国大会出場に燃えている。

彼女の決断は、大きな示唆を与えている。それは種目独自の楽しさを確保し、合理的な練習プログラムの中で技能の向上を図るというスポーツの基本に叶っていることである。それは空手ばかりでなく他の種目についても言える。例えば、テニスにしても中学3年間部活動として消費する時間とエネルギーの何パーセントか何割かで部活動で得る何倍かの楽しさと技術の向上を計ることが期待できる。それ以上に、スポーツを通じて得られる人間関係にしても強制と上下関係の厳しさから開放され、真にスポーツの場での教えるものと教わるものとの関係を体得し人間的成長に資することが期待されるのである。

彼女の決断は、まだ例外的でありほとんどの中学生は学校側の指導のもとに運動部に入部するのが一般的である。そして、学校以外でスポーツを楽しむといっても現状ではすべての種目に対応できないのが実情である。しかし、できる種目から始めれば良い。多少の経済的負担は覚悟しなければならないが、そのことによるスポーツの楽しさと技術の習得は学校を卒業して社会人になってからの日常生活のなかにスポーツを取り入れる可能性を飛躍的に増大させるであろうし、学校時代のゆとりを確保することと思えば安上がりである以上に見逃してはならないメリットがある。

しかしながら、現実に中学進学と共に道場を止めていく子どもたちを見ながら、栗田はただ歯ぎしりして残念がっているばかりではない。彼は時代の流れと社会の変化に関心を払い、高齢化社会の進行がやがてスポーツ欲求を新たに喚起し、学校体育の変革を促すだろうと期待している。彼は学校体育の目標は何かについて関心をもっており、文部省が小・中・高校の教科体育が生涯スポーツへの橋渡しの役割を担うべく位置づけられている、ことに意を強くしている。

栗田は、空手に情熱を注いできたし、現在も注いでいる。今でこそ、主として小学生が対象

だがやがて中学・高校に進学しても空手ができる環境が整えられる日を待ち望んでいる。そのためには学校側の姿勢が好転することが必要だが、時代の流れと社会の変化が否応なく学校側の対応に影響を与えずにはおかないと確信して

いる。そして幸っちゃんの決断がそのひとつの具体的な形だと思っている。栗田は、ひとりでも多くの幸っちゃんが出てくることを望んでいる。(S.62.1.21)